

○広島の復興の軌跡(第16回)～世界平和記念聖堂～

世界各地で紛争や過激テロが頻発し、大戦前夜の風潮が漂っている。被爆71年目を迎え、過ちを二度と繰り返さないためにも広島復興の軌跡を正しく理解しておくことが求められている。

昨年11月に日本建築家協会中国支部の大会が世界平和記念聖堂で開かれ、講演会に先立って施設見学とパイプオルガンの演奏を聞く機会があった。堂内に響き渡る荘厳な音色に圧倒されるとともに、残響で若干聞き取りにくい講演も聖堂の中で行うことの格調の高さを感じた。

被爆前後の状況

幟町教会は明治の中頃から現在地にあり、広島地区のカトリック教会の中心的な存在。爆心地より1.2Kmの距離にあり、聖堂は倒壊し、司祭館は倒壊を免れたが延焼し、全てが灰燼に帰した。ラサール神父等も司祭館で被爆し重傷を負ったが、自力で脱出し、長束の修練院に避難。

仮設の教会

1945年12月にラサール神父は幟町に戻り、3畳のバラックを建てて居を構える。そこは聖堂・教室・応接間・居間・寝室等を兼ね、クリスマス・イブやミサが行われた。

1946年に教会の再建が本格化。組立式の6畳のセット住宅を2棟つなぎ合わせて聖堂兼伝道場とし、日曜日のミサやレコードコンサートに利用され、100人以上が集う。その年の12月には司祭館が落成。2階は記念聖堂が完成するまで仮聖堂として、終戦直後の教会活動を支えた。

設計の実施

ラサール神父は世界中を廻って被爆者の霊を慰める聖堂を建てたいと決意し、1946年8月から1年余の巡歴の旅に出て教皇の賛意も得、帰国後募金活動を開始する。慰霊だけでなく「世界平和」という理念を掲げたことにより世界中から多くの善意が寄せられた。

建設費の目処がついた段階で1948年に設計コンペを実施したが、1等の該当者がなく、審査委員であった村野藤吾に設計を委ねる。コンペは建築界に物議を醸すこととなったが、結果として、コンペの条件であった日本的・モダンスタイル・宗教的・記念的(荘厳性)という要求を満たす聖堂が実現される運びとなった。

建設

聖堂の建設は1950年から始まるが、先行して講堂と会館を合わせたザビエル・ホールが1949年9月に完成。1950年6月に朝鮮戦争が勃発して過度のインフレによる急激な物価上昇と建設資材不足に陥り、1951年には工事の中断に追い込まれる。

1951年3月に広島平和記念聖堂建設後援会を結成。募金目標を4千万円とし、それまでの義援金と合わせて総額1億円とする。

支援体制が整ったこともあり、施工者清水建設も工事を再開。設計者も施工者もコスト削減のための知恵を出し合うとともに細部まで熱意を込めて丁寧に作り上げた。

完成及びその後

工事着工から4年余の工期で1954年8月に献堂式(竣工)。海外からの寄贈により聖堂に備え付けられた機器や装飾品等は下記のとおり。

- ・パイプオルガン(ドイツ・ケルン市)・大小4個の平和の鐘(ドイツ・ボフメルフェライン社)
- ・その他、ステンドグラス・本祭壇・祭壇の聖櫃・説教台・玄関扉・モザイク壁画等多数の品々

完工式での祝辞は、いずれも「聖堂が世界からの浄財で建設されたことを称え、平和への道の象徴」として意義づけた。愛宮(ラサール)神父の謝辞は、建設関係者の多大な労苦へのねぎらいと



被爆後空撮
丸印が敷地、手前縮景園



1952年建設中
(佐々木雄一郎氏撮影)



1954年竣工時、右側に
ザビエル・ホール



外観



内観



遠景、右側半円形屋根
はエリザベト音楽大学

募金協力者への感謝の念を表した。

設計者の村野は10年後の姿を見て欲しいと語り、時の経過とともに環境に馴染み風格が出てくることを期待。数度の補修工事を経ながらも60年を経過した今なお健在であり、2006年7月には戦後の建物として初めて国の重要文化財に指定された。

完成後の動きとしては、ザビエル・ホールを解体して1979年7月にエリザベト音楽大学ホールが聖堂の南側に完成。1981年2月に教皇ヨハネ・パウロ二世は平和記念公園で全世界に向けた平和アピールを宣言し、聖堂を訪れて祈りを捧げた。平和アピールには「過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです。ヒロシマを考えることは平和に対しての責任を担うことです。」という一文がある。

廢墟の地に建ったこの聖堂は、復興に立ち上がる広島市民に希望と勇気を与えただけでなく、世界から平和への願いが込められた贈りものであり、私たちはそれに応えていく責務を負っている。

*参考文献：石丸紀興著「世界平和記念聖堂」

(編集委員 瀧口信二)

第22号 (平成28年3月15日)

○広島復興の軌跡 (第17回) ~旧広島大学東千田キャンパス~

私が学生だった頃(昭和40年代)、広大キャンパスは東千田町、千田町、東雲町、霞町、福山市等に分散し、タコ足大学と揶揄されていた。教養部時代は東千田の本部キャンパスで過ごし、専攻学部に進むとそれぞれのキャンパスで学ぶ。市内間ならまだしも、クラブやサークル活動で福山分校との行き来には不自由を感じるが多かった。

大学紛争が激しかった頃、西条へのキャンパス移転の話が持ち上がったが、学内も周辺地域も反対する人はほとんどいなかった。しかし、広大跡地がズタズタに切り裂かれ、高層マンションが林立する今の姿を見ると、これで良かったのかと虚しさを覚える。

ここでは本部のあった東千田キャンパスに絞り、戦前からの歩みを簡単に紐解くこととする。

戦前の状況

明治35年、広島高等師範学校を東千田キャンパスに設置。東京高等師範学校に並ぶ中等教員養成機関として「教育の西の総本山」と称される。後に広大教育学部の源流となる。昭和4年には昇格して広島文理科大学が創設され、高等師範学校はその附属校となる。

その際、大学の本館として整備されたのが現在の旧理学部1号館。高等師範学校の木造の校舎や寄宿舎が建ち並ぶなか、昭和6年に部分竣工。同8年に今のヨの字型に完成し、鉄筋コンクリート造3階建て、延床面積約8,500㎡は当時としては立派な建物であった。



高等師範学校時代

被爆前後の状況

1945年6月に大学本館の3分の1は中国地方総監府に接收され、師範学校の附属小学校は集団疎開をしていた。

1945年8月6日の原爆投下により、爆心地から約1.4kmにあった文理科大学及び師範学校の木造の校舎等は一瞬にして倒壊し、火災により全てを焼失。大学本館等の非木造の建物も外形は留めたが、内部は火災の延焼で全焼した。

校舎を焼失した文理科大学と高等師範学校は賀茂郡の黒瀬町に仮移転したが、焼け残った鉄筋コンクリート造校舎の応急修理をして、1946年5月に附属小学校が復帰し、1946年9月に文理科大学が本館に復帰した。



被爆後の状況

新制広島大学誕生

戦前、総合大学は7つの帝国大学のみ。広島県には文理科大学しかなかったため、8番目の帝国大学を誘致する運動があったが、実現できなかった。戦後の教育改革のなか、大学は焼け野原の広島ではなく岡山の方へという激しい総合大学の誘致合戦があったという。

1949年5月に国立学校設置法が施行され、新制「広島大学」が誕生。大学を設立するための費用は国費ではなく、3分の1は県費で、残り



昭和30年代の状況

3分の2は寄付金で賄われた。多くの町内会で募金活動が始まり、資金を集めるためのプロ野球の公式試合開催や宝くじ発売なども行われた。

広大発足時には文理科大学や高等師範学校を初め県内の8校に及ぶ前身学校があり、後に広島医科大学が併合された。東千田キャンパスは大学本部並びに政経学部、文学部、理学部、教育学部（一部）が設置され、後に附属小・中・高等学校と入れ替わりに皆実町から教養部が移転してくる。他の工学部は千田町、医学部は霞町、一部の教育学部は東雲町、水畜産学部と一部の教育学部は福山市。

初代学長の故森戸辰男氏は就任のために文部大臣を辞職し、開学式で建学の精神となる「**自由で平和な一つの大学**」の原型を示した。東千田キャンパスへの統合を推進し、平和都市広島に相応しい大学を目指す。その象徴として正門前に不死鳥の名をもつ**フェニックス**を植え、正門から理学部1号館に至る中央通り、通称「**森戸道路**」を整備した。

大学紛争

1968年から69年にかけて続いた東大紛争に連鎖して広大でも正門をバリケードで封鎖し、教養部は休講状態になる。1969年5月に全共闘と学長との第1回目の団体交渉が行われ、8月には機動隊が導入され強制的に封鎖を解除した。

大学紛争の反省を踏まえ、その問題点を克服するため自主的に大学改革や東広島市への統合移転を推進した。1982年に工学部が東広島キャンパスに移転し、順次段階的に進め、1995年に全学部の移転が完了した。

東千田キャンパスの跡地利用計画

移転を期に県立がんセンター、県庁舎移転、サッカー専用スタジアム等の建設計画が上がったが、用地買収費等が折り合わず断念。

全敷地のごく一部は、広島大学の東千田キャンパスとして法学部・経済学部の夜間主コースと一部の大学院及び放送大学を設置。

森戸道路と旧理学部1号館を含むエリアは市の東千田公園となり、敷地の北側エリアは2棟の高層マンションが建っている。

敷地の南側エリアは2006年に広島地域大学長有志による「**世界の知の拠点構想**」が提唱されたが、高層マンションを主体にした企業グループによる「**広島ナレッジシェアパーク**」が2020年の完成を目指して現在建設中である。

一方、この度広島大学の**東千田未来創生センター**が完成し、4月から約400人の医学部1年生が東広島市から戻ってくる。統合移転した1995年以来初めての都心回帰で新たな動きが期待される。

旧理学部1号館の活用

1991年に理学部の移転後、空き家のまま補修もされずに被爆建物として現在は市が管理。昨年度の耐震調査の結果「震度6で倒壊の恐れあり」と診断され、耐震補強の方法と概算工事費が示された。

今年度は建物の保存・活用方法のアイデアを市民に募り、意見を参考にして来年度に方針をまとめる予定。個人的には外壁を残し、内側に高層の校舎を建てて教養部の学び舎にする案がよい。 広大生として2年間市内で過ごし、**建学の精神**を身につけてから各専門コースを学んで欲しい。 これから増大するであろう社会人教育のためにも門戸を広げ、広大跡地を真に**知の拠点**として残す最後のチャンスと言えよう。

参考文献：広島大学の歴史（編集 広島大学文書館）



世界の知の拠点構想



ナレッジシェアパーク
(イメージ図)



旧理学部1号館の現状

(編集委員 瀧口信二)

○広島の復興の軌跡（第18回）～平和記念公園レストハウス～

元安橋の西詰に、平和記念公園側からは樹木に隠されるようにレストハウスが建っている。公園内に残る唯一の被爆建物だが、どこか邪魔者のような扱いである。現在、耐震補強をして内部を改装し、新たな息吹を吹き込もうという動きがあるが、ここまでに至る歴史を紐（ひも）解いてみたい。

戦前の状況

レストハウスが建つ中島本町（当時の町名）は、商店や映画館等が建ち並ぶ市内有数の繁華街であった。昭和4年、中島本通り商店街の一角に大阪に本店をもつ「大正屋呉服店」（設計：増田清）が完成。木造2階建てが続く町並みにあって、鉄筋コンクリート造3階建てのモダンな建物は、一際目立つランドマーク的な存在であった。

内部の売場も下足のまま上がれ、ショーウィンドーのある1階と2階・3階も売場で、屋上からは市内が一望できたという。市民に親しまれた呉服店も前大戦が激化し、経済統制が敷かれた影響で昭和18年末に閉店。



戦前の姿

被爆前後の状況

この建物は、昭和19年に広島県燃料配給組合が買い取り、「燃料会館」と呼ばれ、1年後の被爆の日を迎える。

原爆ドームと同様に爆心地から約170mの至近距離に位置していたが、爆心地側に開口部が少なく強固な建物であったため、基本的な形態を留めることができた。ただ、被爆により屋根スラブや梁・床の一部が破損し、地下室を除いて内部は全焼した。出勤していた37名の職員も29名が即死し、即死を免れた8名も、地下室にいて奇跡的に軽傷で済んだ1名を除き、死亡したと推察されている。



被爆直後の姿

戦後の変遷

昭和21年には破損した屋根スラブを撤去し、木造小屋組みの屋根を架ける等の補修を加え、引き続き燃料会館として使用。

平和記念公園の建設に伴い、取り壊すか否かの議論が取り沙汰されたが、昭和32年に広島市が買収し、東部復興事務所となった。

さらに昭和57年に改装して市観光協会の事務所となり、「レストハウス」と名称を改め、現在に至る。

1階は観光客用の案内所・休憩所・売店があり、2・3階に（財）広島観光コンベンションビューローが入居。建物は何度も手が加えられ、創建当時の面影はあまり残されていないが、地下室だけは被爆当時のまま保存され、予約すれば見学も可能。

平和記念公園のレストハウスとしては手狭で、場所がわかりにくいこともあり、市は建替えの方針に傾く。



現在の姿



内部の様子

レストハウス建替え構想

市は平成2年度の予算にレストハウス整備費を計上し、平成4年春の新元安橋完成に合わせてオープンさせたい意向であったが、市議会で慎重論が強く、建替えか保存かの判断は先送りされる。

平成5年、市民らは「元大正屋呉服店を保存する会」を設立し、「原爆遺跡保存運動懇談会」とともに、現状保存を求める署名を集め、市に請願した。

被爆50周年を前にして平成6年、市は市内の被爆建物を調査し



地下室

直し、この建物は「老朽化が進行し、このままではレストハウスとしては使用不可」との判断を下す。そして平成7年、市は平和記念公園を設計した丹下健三氏に監修を依頼し、地下室を残したまま地上部分を解体してレストハウスを建替えるという構想を発表。当時、隣地に国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の計画が進行しており、地下でレストハウスと連結する案もあったと聞く。

これに対して市民団体が反発し、ユネスコや文化庁も反対。ユネスコは「レストハウスが世界遺産の原爆ドームの緩衝地帯に位置するため現状保存させるべき」と強く意見した。これらの抗議活動を重くみた当時の平岡市長は自分の在任期間中は計画を延期すると表明。平成11年の退任後も、市は財政難を理由に再延期を発表。

レストハウスのこれから

レストハウスの改修が被爆70周年の記念事業に位置づけられ、平成26年度から建物の老朽度と耐震診断の調査を行い、昨年11月に改修計画の概要が公表された。

その概要は以下のとおり

- ・建物の内部は、戦前の呉服店の雰囲気再現し、休憩スペースを2・3階まで拡充。展示スペースも新設し、被爆前の町並み写真や被爆遺品等を展示。
- ・建物の外壁にエレベーターを設置。大規模地震にも耐えられるように補強工事を施す。
- ・平成29年度着工し、30年度に完成予定。

この建物の設計者・増田清は、旧市庁舎や本川小学校を設計した広島市に縁の深い建築家であり、創建時の元大正屋呉服店は今とは比べものにならないほどの存在感があった。内部のみならず外観もできるだけ創建時に戻して、公園内に残る唯一の被爆建物として胸を張ってアピールできる存在になって欲しい。
(編集委員 瀧口信二)

第24号（平成28年7月15日）

○広島復興の軌跡（第19回）～旧広島市民球場～

旧球場跡地の現状は、周囲に仮囲いが設置され、時々フードフェスタ系のイベント等が開かれている。開催中は賑わっているが、利用されていないときは閑散としている。熱烈なサンフレッチェ・ファンからはこの地にサッカー場を望む動きが活発化している。その熱い気持ちもわからないではないが、この地の持つポテンシャルを最大限に発揮する最適な役割を見出すために、ここは冷静にこの地の歩みを振り返ってみたい。

基町の歴史

1589年、毛利輝元が築城を始め、この地を広島と命名。広島城の外堀と太田川に囲われた城郭一帯は「広島開基の地」として基町と呼ばれる。江戸時代には武家屋敷が広がり、明治以降は陸軍第5師団が置かれ、軍都を象徴する町となる。

広島城の南側にあった西練兵場は、軍の許可があれば博覧会や物産共進会のイベント等も開催。毎年、戦死者を慰霊する広島招魂祭では競馬等が開かれ、屋台や見世物小屋で賑わい、市民の楽しみの場となっていた。

球場跡地は広島護国神社の前広場と広島第一陸軍病院第一分院にまたがっている。1945年の原爆投下により軍の施設は倒壊・炎上し、基町は壊滅状態となる。

戦後の変遷

敗戦により軍用地は撤収され、普通財産の国有地に戻る。1946年8月には旧護国神社前広場で平和復興広島市民大会が開かれる。1947年に市民から名称募集を行い、慈仙寺鼻広場を「平和広場」、護国神社前広場を「市民広場」と決定。

1947年、48年の第1回と第2回の平和祭式典は平和広場で、49年の第3回は市民広場で開催。1947年12月の広島巡幸では、天皇が市民広場で約5万人の市民を前にお言葉を述べられた。

1946年の戦災復興都市計画で周囲を中央公園として指定されたが、戦後の住宅不足を解消するため公営住宅が建設される。

1949年に広島平和記念都市建設法が制定され、1952年の平和記念都市建設計画では平和記念公園と原爆ドーム区域のみ平和記念施設に指定され、中央公園は外された。

広島市民球場建設の経緯

1950年に広島カープが結成され、観音の県営総合グラウンドの野球場をホームとする。1953年頃から交通の不便さと炎天下での観戦を解消するため、市の中心部にナイター球場建設の機運が高まり、市議会・県・地元経済界・球団が一体となって「市営市民球場建設促進委員会」を設置。

1954年、基町が建設予定地に決まったが、住民の立ち退き反対運動や国との交渉に難航。1955年の市長選で浜井市長から渡辺忠雄市長に交代し、渡辺市長は球場建設を公約に掲げ、その推進を確認。1956年に場所を児童文化会館前の市民広場に決定したが、建設費の目途が立たず再び停滞。

地元財界で構成する二葉会等からの寄付により1957年7月に広島市民球場が完成。広島カープのホームグラウンドとしてのみならず、市民のレクリエーション施設としても幅広く利用された。

オープン当時は約1万7千人だった観客収容人数もスタンドの増設を重ねて約3万2千人まで増えたが、2000年代に入ると他球場に比べて狭隘なフィールドと諸設備の老朽化が進んだことから新球場の建設が検討される。

広島駅ヤード跡地へ移転決定

広島の復興のシンボルとして現地建替えの強い要望もあったが、2005年に建設場所を広島駅のヤード跡地とする「新球場建設の基本方針」を決定。その後、球場跡地利用の提案募集や検討会議が開催され、2010年に跡地利用計画図のイメージ図まで公表されたが、決定に至らず。

一方、2009年4月に新球場がオープンし、カープの本拠地となる。旧球場は2010年9月に閉鎖され、解体が始まり、2012年2月末にライトスタンドの一部を残して解体が完了。

解体後の動き

2011年4月、松井新市長が誕生し、前市長時代の跡地利用計画案の全面見直しを宣言。球場跡地の活用策を考える跡地委員会を開催し、2013年3月には「芸術文化」・「緑地広場」・「水辺」の3エリアを設定すると結論付けたが、2013年6月にサッカースタジアム検討協議会が始まって中断し、現在に至っている。

2013年、民間にも無料で利用できるように市の公園条例を緩和し、2014年からは公園として一般開放したが、仮囲いが残る閉鎖的な空間のため、日常は人が寄り付かない。

行政は、サッカー場問題のケリがつかないからと言い訳をするだろうが、4年間放置したことによる社会的損失を考えて欲しい。**今、この地は持てる力を発揮できずに泣いている。**

(編集委員 瀧口信二)



1949年第3回平和祭



1950年頃の遠景



1957年市民球場完成当時

